

1 はじめに

地方公共団体の会計は、予算の議決を通じて、議会による民主的統制の下に置かれているため、予算の適正かつ確実な執行を図るという観点から、確定性、客観性、透明性に優れた現金主義・単式簿記を採用しています。

一方で、地方公共団体の厳しい財政状況の中、財政の透明性を高め住民に対する説明責任をより適切に果たし、財政の効率化・適正化を図るため、従来の現金主義・単式簿記による予算・決算制度に加えて、発生主義・複式簿記といった企業会計的手法を活用した財務書類の開示が推進されてきました。発生主義を採用することで、減価償却費や引当金といった現金主義では見えにくいコスト情報の認識が可能となり、複式簿記を採用することで資産・負債といったストック情報の総体の一覧的把握が可能となります。また、現金主義・単式簿記だけでは見えにくかったこれらの情報が「見える化」されることから、財務状況をわかりやすく開示することができ、資産・債務管理や予算編成・行政評価など行政内部のマネジメント機能の向上に活用することができます。

これまでに地方公会計の整備は全国的に進められ、三次市においても総務省から示されたモデルのうち「総務省方式改訂モデル」を採用し平成20年度決算分から財務書類を作成してきました。しかし、財務書類の作成方式が「基準モデル」や「総務省方式改訂モデル」など複数あることから各地方公共団体間での比較の可能性の確保に課題があるほか、多くの地方公共団体において既存の決算統計データを活用した簡便な作成方式である総務省方式改訂モデルが採用され本格的な複式簿記の導入が進んでいないことや、公共施設等の管理に必要な固定資産台帳の整備が十分ではないといった課題もありました。

このため、総務省では平成27年1月に「統一的な基準による地方公会計マニュアル」を公表し、平成28年度決算分から当該基準による財務書類等を原則として全ての地方公共団体において作成・公表し、予算編成等に積極的に活用するよう地方公共団体に要請がなされました。

三次市では、平成28年度決算分から「統一的な基準」に基づいた財務書類等を作成し公表しています。

2 統一的な基準の特徴

統一的な基準に基づく財務書類は、会計処理方式として発生主義・複式簿記を採用し、歳入歳出データから複式仕訳を作成することにより、現金取引（歳入・歳出）のみならず、フロー情報（期中の収益・費用及び純資産の内部構成の変動）及びストック情報（資産・負債・純資産の期末残高）を網羅的かつ誘導的に記録・表示することができます。

また、各地方公共団体が「統一的な基準」による財務書類を作成・開示することから、各団体間での比較の可能性が確保されます。

3 対象とする団体（会計）の範囲

三次市の財務書類の対象となる団体（会計）は次のとおりです。

区 分		対象とする団体（会計）
連結財務書類	一般会計等	一般会計，土地取得特別会計
	公営事業会計	国民健康保険特別会計，診療所特別会計，介護保険特別会計，介護サービス，後期高齢者医療特別会計
	公営企業会計※	病院事業会計，水道事業会計，下水道事業会計
	一部事務組合 広域連合	備北地区消防組合，広島県後期高齢者医療広域連合
	第三セクター等	全部連結
比例連結		株式会社三次ケーブルビジョン，株式会社広島三次ワイナリー，有限会社みわ375，株式会社君田トエンティワン，地域医療連携推進法人備北メディカルネットワーク，吉舎食品株式会社

※平成31年4月1日に下水道事業特別会計及び農業集落排水事業特別会計を一つの会計に統合するとともに、地方公営企業法を全部適用し、下水道事業会計へ移行しました。このため令和元年度決算分から、下水道事業会計を連結対象団体（会計）の対象としています。

4 作成基準日等

作成基準日は、会計年度の最終日である令和2年3月31日です。なお、出納整理期間（会計年度終了後の4月1日から5月31日）が設けられている会計においては、出納整理期間における現金の受払い等が終了した計数をもって計上しています。

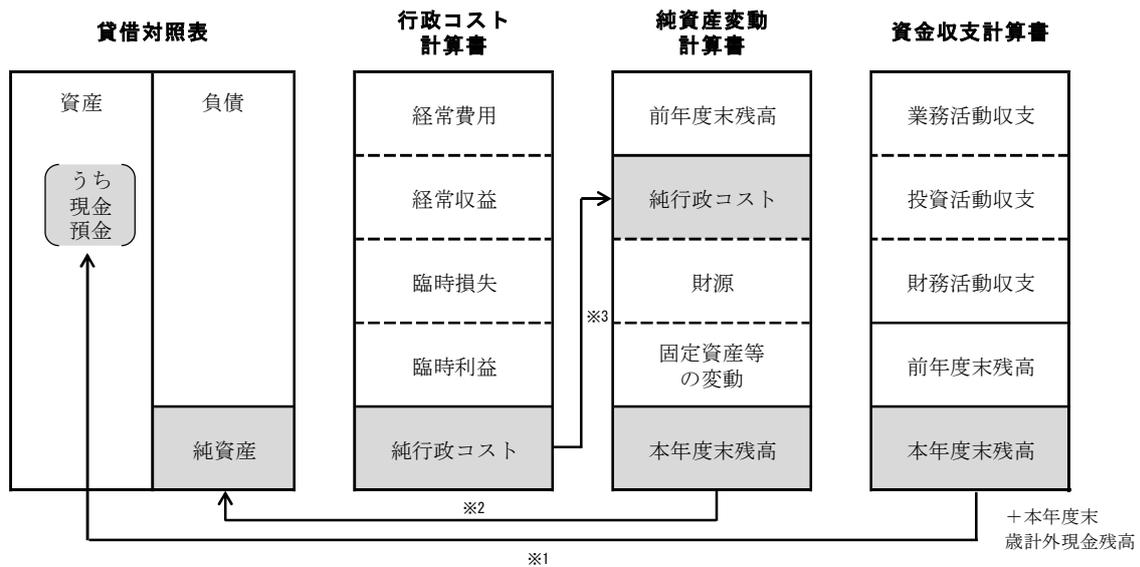
また、財務書類の数値は、表示単位未満を四捨五入して表示しているため、合計金額が一致しない場合があります。なお、単位未満の計数があるときは「0」を表示し、計数がないときは「-」を表示しています。

5 財務書類の概要

統一的な基準による財務書類は、貸借対照表、行政コスト計算書、純資産変動計算書及び資金収支計算書の4表から構成されています。

区 分	内 容
貸借対照表 (BS: Balance Sheet)	会計年度末（基準日）時点で、どのような資産を保有しているのか（資産保有状況）と、その資産がどのような財源でまかなわれているか（財源調達状況）を対照表示した財務書類です。基準日時点における財政状態（資産・負債・純資産といったストックの残高及び内訳）を明らかにします。
行政コスト計算書 (PL: Profit and Loss statement)	一会計期間において、資産形成に結びつかない行政活動に係る費用と、その行政活動と直接の対価性のある使用料・手数料などの収益を対比させた財務書類です。これにより、その差額として、一会計期間中の行政活動のうち、資産形成に結びつかない行政活動について税収等でまかなうべき行政コスト（純行政コスト）を明らかにします。また、現金収支を伴わない減価償却費や退職手当引当金といった各種引当金等も費用として計上します。
純資産変動計算書 (NW: Net Worth statement)	貸借対照表の純資産が1年間でどのように変動したかを表す財務書類です。地方税、地方交付税などの税収等や国県等補助金が純資産の増加要因として計上され、行政コスト計算書で算出された純行政コストが純資産の減少要因として計上されることなどを通じて、1年間の純資産の変動を明らかにします。
資金収支計算書 (CF: Cash Flow statement)	一会計期間中における行政活動に伴う現金の受払いを「業務活動収支」、「投資活動収支」、「財務活動収支」の3つの区分に分けて表示した財務書類です。

以上の財務書類4表の相互関係を示すと、次のとおりです。



※1 貸借対照表の資産のうち「現金預金」の金額は、資金収支計算書の本年度末残高に本年度末歳計外現金残高を足したものと対応します。

※2 貸借対照表の「純資産」の金額は、純資産変動計算書の本年度末残高と対応します。

※3 行政コスト計算書の「純行政コスト」の金額は、純資産変動計算書に記載されます。

6 貸借対照表(令和2年3月31日現在)

(単位：百万円)

	資産の部			負債の部			
	一般会計等	全体	連結	一般会計等	全体	連結	
固定資産	147,650	205,651	207,118	固定負債	51,718	106,601	107,335
有形固定資産	119,357	184,630	185,432	地方債	47,155	68,851	68,981
事業用資産	56,714	61,848	62,408	長期未払金	-	-	0
インフラ資産	58,391	112,277	112,277	退職手当引当金	4,533	6,060	6,664
物品	4,252	10,505	10,747	損失補償等引当金	4	4	4
無形固定資産	59	2,403	2,410	その他	26	31,686	31,686
投資その他の資産	28,234	18,617	19,276	流動負債	12,977	17,006	17,239
投資及び出資金	14,912	4,773	4,135	1年内償還予定地方債	5,433	7,711	7,747
投資損失引当金	△ 2	△ 2	-	未払金	-	1,091	1,145
長期延滞債権	268	346	349	未払費用	-	-	29
長期貸付金	-	13	13	前受金	-	-	5
基金	13,075	13,517	14,790	前受収益	-	-	-
その他	1	23	42	賞与等引当金	327	920	987
徴収不能引当金	△ 20	△ 52	△ 52	預り金	202	215	223
流動資産	11,825	18,066	18,909	その他	7,015	7,068	7,103
現金預金	8,310	12,422	13,065	負債合計	64,695	123,607	124,574
未収金	43	1,779	1,839	純資産の部			
短期貸付金	-	-	1	固定資産等形成分	150,646	208,913	210,389
基金	2,996	3,262	3,270	余剰分(不足分)	△ 55,866	△ 108,803	△ 109,033
棚卸資産	206	251	377	他団体出資分	-	-	96
その他	277	377	384	純資産合計	94,779	100,110	101,452
徴収不能引当金	△ 7	△ 26	△ 26	負債及び純資産合計	159,474	223,716	226,026
繰延資産	-	-	-				
資産合計	159,474	223,716	226,026				

令和元年度末において、一般会計等で1,594億7千4百万円、全体会計で2,237億1千6百万円、連結会計で2,260億2千6百万円の資産を形成しています。資産の大部分は有形固定資産であり、そのうち一般会計等で567億1千4百万円、全体会計で618億4千8百万円、連結会計で624億8百万円が学校、文化施設やコミュニティセンターなどの事業用資産であり、一般会計等で583億9千1百万円、全体会計で1,122億7千7百万円、連結会計で1,122億7千7百万円が道路、橋りょうや水道などのインフラ資産となっています。

一方、将来世代の負担分である負債は、一般会計等で646億9千5百万円、全体会計で1,236億7百万円、連結会計で1,245億7千4百万円で、地方債がその大部分を占めています。

この結果、資産と負債の差額であり、過去及び現世代の負担分(国・県の負担を含む)を表す純資産は一般会計等で947億7千9百万円、全体会計で1,001億1千万円、連結会計で1,014億5千2百万円となっています。

人口一人当たりの貸借対照表

(単位：千円)

	資産の部			負債・純資産の部			
	一般会計等	全体	連結	一般会計等	全体	連結	
有形・無形固定資産	2,302	3,605	3,621	負債	1,247	2,383	2,401
投資その他の資産	544	359	372				
流動資産	228	348	364	純資産	1,827	1,930	1,956
繰延資産	-	-	-				
資産合計	3,074	4,312	4,357	負債及び純資産合計	3,074	4,312	4,357

※人口は令和2年1月1日現在の住民基本台帳の人口51,880人を用いています。

7 行政コスト計算書(平成31年4月1日～令和2年3月31日)

(単位：百万円)

項目	一般会計等	全体	連結
経常費用	29,814	52,705	61,968
業務費用	17,211	30,738	33,341
人件費	4,367	9,327	10,966
物件費等	12,530	20,175	20,604
その他の業務費用	313	1,237	1,771
移転費用	12,603	21,967	28,627
補助金等	6,992	18,055	24,711
社会保障給付	3,897	3,904	3,903
他会計への繰出金	1,707	0	0
その他	7	8	13
経常収益	1,281	11,321	12,501
使用料及び手数料	522	9,812	9,813
その他	759	1,509	2,688
純経常行政コスト	28,533	41,385	49,467
臨時損失	2,657	2,709	2,710
災害復旧事業費	2,559	2,559	2,559
資産除売却損	97	122	123
投資損失引当金繰入額	1	1	-
損失補償等引当金繰入額	-	-	-
その他	-	28	28
臨時利益	39	39	39
資産売却益	38	38	38
その他	1	1	2
純行政コスト	31,151	44,055	52,137

令和元年度における経常費用は、一般会計等で298億1千4百万円、全体会計で527億5百万円、連結会計で619億6千8百万円で、物件費、維持補修費や償却資産の減価償却費などから構成される物件費等の割合が高くなっています。

これに対し、受益者負担である使用料及び手数料などから構成される経常収益は、一般会計等で12億8千1百万円、全体会計で113億2千1百万円、連結会計で125億1百万円であり、経常収益から経常費用を控除した純経常行政コストは、一般会計等で285億3千3百万円、全体会計で413億8千5百万円、連結会計で494億6千7百万円となっています。

純経常行政コストから臨時損失を控除し臨時利益を加えた、税収等や国県等補助金で賄うべき純行政コストは、一般会計等で311億5千1百万円、全体会計で440億5千5百万円、連結会計で521億3千7百万円となっています。

人口一人当たりの行政コスト計算書

(単位：千円)

項目	一般会計等	全体	連結
経常費用	575	1,016	1,194
人件費	84	180	211
物件費等	242	389	397
その他の業務費用	6	24	34
移転費用	243	423	552
経常収益	25	218	241
純経常行政コスト	550	798	953
臨時損失	51	52	52
臨時利益	1	1	1
純行政コスト	600	849	1,005

※人口は令和2年1月1日現在の住民基本台帳の人口51,880人を用いています。

8 純資産変動計算書(平成31年4月1日～令和2年3月31日)

(単位：百万円)

項目	一般会計等	全体	連結
前年度末純資産残高	92,586	96,324	97,783
純行政コスト(△)	△ 31,151	△ 44,055	△ 52,137
財源	30,223	42,813	50,785
税金等	23,593	28,479	32,388
国県等補助金	6,629	14,334	18,397
本年度差額	△ 929	△ 1,242	△ 1,352
資産評価差額	-	-	0
無償所管換等	127	285	288
他団体出資等分の増加	-	-	-
他団体出資等分の減少	-	-	-
比例連結割合変更に伴う差額	-	-	△ 9
その他	2,996	4,742	4,742
本年度純資産変動額	2,194	3,785	3,669
本年度末純資産残高	94,779	100,110	101,452

令和元年度における純資産残高は、一般会計等で947億7千9百万円、全体会計で1,001億1千万円、連結会計で1,014億5千2百万円で、期首と比較し、一般会計等で21億9千4百万円、全体会計で37億8千5百万円、連結会計で36億6千9百万円増加しています。一般会計等では、純行政コストを地方税や地方交付税等の一般財源である税金等や国県等補助金で賄いきれていません。

人口一人当たりの純資産変動計算書

(単位：千円)

項目	一般会計等	全体	連結
前年度末純資産残高	1,785	1,857	1,885
純行政コスト(△)	△ 600	△ 849	△ 1,005
財源(税金等・国県等補助金)	583	825	979
その他の増減	60	97	97
本年度純資産変動額	42	73	71
本年度末純資産残高	1,827	1,930	1,956

※人口は令和2年1月1日現在の住民基本台帳の人口51,880人を用いています。

9 資金収支計算書(平成31年4月1日～令和2年3月31日)

(単位：百万円)

項目	一般会計等	全体	連結	
①業務活動収支	3,088	4,895		
業務支出	25,456	45,243		
業務費用支出	12,853	23,275		
移転費用支出	12,603	21,967		
業務収入	29,588	50,965		
税収等収入	23,556	27,936		
国県等補助金収入	4,804	11,794		
使用料及び手数料収入	522	9,829		
その他の収入	706	1,405		
臨時支出	2,559	2,576		
災害復旧事業費支出	2,559	2,559		
その他の支出	-	17		
臨時収入	1,514	1,748		
②投資活動収支	△ 2,134	△ 3,031		
投資活動支出	4,360	5,594	内訳省略	
公共施設等整備費支出	2,611	3,825		
基金積立金支出	1,206	1,276		
投資及びひ出資金支出	57	-		
貸付金支出	486	493		
その他の支出	-	-		
投資活動収入	2,226	2,562		
国県等補助金収入	333	660		
基金取崩収入	1,337	1,343		
貸付金元金回収収入	491	492		
資産売却収入	65	65		
その他の収入	-	2		
③財務活動収支	△ 1,914	△ 2,947		
財務活動支出	6,099	8,337		
地方債等償還支出	6,080	8,319		
その他の支出	19	19		
財務活動収入	4,184	5,391		
地方債等発行収入	4,184	5,391		
その他の収入	-	-		
本年度資金収支額	△ 961	△ 1,083	△ 1,090	
前年度末資金残高	2,068	6,303	6,952	
本年度末資金残高	1,107	5,220	5,863	
前年度末歳計外現金残高	4,192	4,192	4,192	
本年度歳計外現金増減額	3,010	3,010	3,009	
本年度末歳計外現金残高	7,202	7,202	7,202	
本年度末現金預金残高	8,310	12,422	13,065	

※連結会計については、連結対象団体の内訳を省略しています。

令和元年度における年度末資金残高は、一般会計等で11億7百万円、全体会計で52億2千万円、連結会計で58億6千3百万円で、期首と比較し、一般会計等で9億6千1百万円、全体会計で10億8千3百万円、連結会計で10億9千万円減少しています。

経常的な活動に関する業務活動収支は、一般会計等で30億8千8百万円、全体会計で48億9千5百万円の黒字となっています。これは、地方税や地方交付税等の一般財源が業務収入に計上されていることが要因です。一方、資産形成や投資などに関する投資活動収支は、一般会計等で21億3千4百万円、全体会計で30億3千1百万円の赤字となっています。また、地方債などに関する財務活動収支は、一般会計等で19億1千4百万円、全体会計で29億4千7百万円の赤字となっています。これは、地方債等発行収入より地方債等償還支出が多いことが要因です。

人口一人当たりの資金収支計算書

(単位：千円)

項目	一般会計等	全体	連結	
業務支出	491	872	内訳省略	
業務収入	570	982		
臨時支出	49	50		
臨時収入	29	34		
投資活動支出	84	108		
投資活動収入	43	49		
財務活動支出	118	161		
財務活動収入	81	104		
本年度資金収支額	△ 19	△ 21		△ 21
前年度末資金残高	40	121		134
本年度末資金残高	21	101	113	
本年度末現金預金残高	160	239	252	

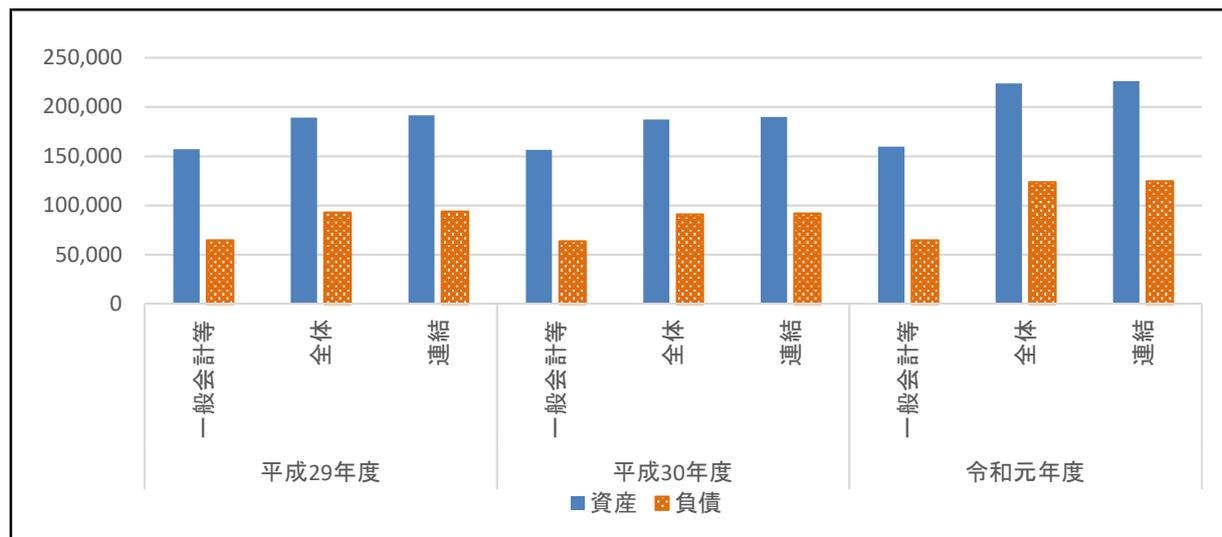
※人口は令和2年1月1日現在の住民基本台帳の人口51,880人を用いています。

10 前年度との比較

(1) 資産・負債の状況

(単位：百万円)

		平成29年度	平成30年度	令和元年度	前年度比較
一般会計等	資産	157,080	156,220	159,474	3,254
	負債	64,646	63,634	64,695	1,061
全体	資産	188,938	187,193	223,716	36,523
	負債	92,682	90,868	123,607	32,739
連結	資産	191,271	189,654	226,026	36,372
	負債	93,742	91,871	124,574	32,703



分析

一般会計等は、資産総額が前年度末から3,254百万円増加(+2.1%)し159,474百万円となった。金額の変動が大きいものは投資及び出資金の増加である。これは主に、連結対象外としていた下水道事業について、平成31年4月1日から地方公営企業法を全部適用し下水道事業会計に移行したことにより、連結対象団体となったため投資及び出資金が増加したことによる。負債総額は前年度末から1,061百万円増加(+1.7%)し64,695百万円となった。金額の変動が最も大きいものはその他であり、一時借入金の増加である。また、地方債(固定負債)は、地方債償還支出が地方債発行収入を上回ったことにより2,049百万円減少した。資産総額のうち有形固定資産の割合が74.8%となっており、これらの資産は将来の維持管理・更新等の支出を伴うものであることから、公共施設等総合管理計画に基づき、施設の集約化・複合化を進めるなど公共施設等の適正管理に努める必要がある。

全体会計では、資産総額は前年度末から36,523百万円増加(+19.5%)し223,716百万円となり、負債総額も32,739百万円増加(+36.0%)し123,607百万円となった。

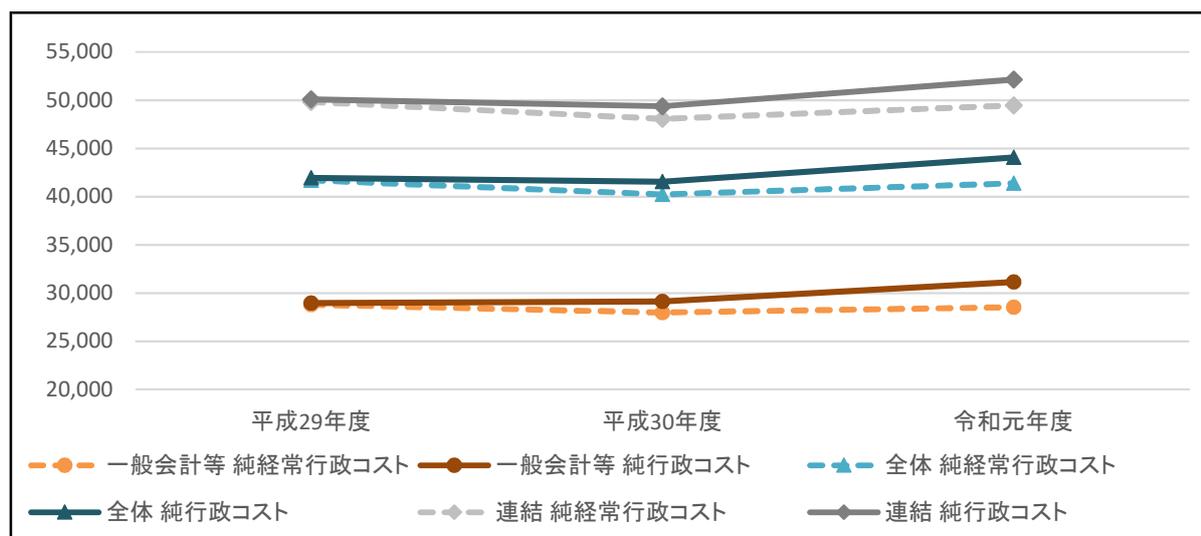
連結会計では、資産総額は前年度末から36,372百万円増加(+19.2%)し226,026百万円となり、負債総額も前年度末から32,703百万円増加(+35.6%)し124,574百万円となった。

全体会計及び連結会計の資産及び負債の増加の主な要因は、平成31年4月1日から下水道事業特別会計及び農業集落排水事業特別会計が地方公営企業法を全部適用し、下水道事業会計として連結対象団体となったためである。

(2) 行政コストの状況

(単位：百万円)

		平成29年度	平成30年度	令和元年度	前年度比較
一般会計等	純経常行政コスト	28,805	27,993	28,533	540
	純行政コスト	28,975	29,148	31,151	2,003
全体	純経常行政コスト	41,695	40,231	41,385	1,154
	純行政コスト	41,937	41,544	44,055	2,511
連結	純経常行政コスト	49,815	48,059	49,467	1,408
	純行政コスト	50,074	49,373	52,137	2,764



分析

一般会計等は、純行政コストが前年度と比較し2,003百万円増加(+6.9%)し31,151百万円となった。その主な要因は、臨時損失が1,390百万円増加(+109.8%)したことであり、特に平成30年7月豪雨災害などにより災害復旧事業費が1,336百万円増加(+109.2%)したためである。また、純経常行政コストは前年度と比較し540百万円増加(+1.9%)した。特に補助金等は1,426百万円増加(+25.6%)したものの、他会計への繰出金が1,263百万円減少(△42.5%)しているが、これは下水道事業会計が法適用となり、繰出金を補助金としたことが主な要因である。また、物件費等は12,530百万円であり、純行政コストの40.2%を占めている。次いで補助金等は6,992百万円であり、純行政コストの22.4%を占めている。今後も、人口減少が見込まれるため「選択と集中」による事業の見直しや、公共施設等総合管理計画に基づき、施設の集約化・複合化を進め施設の維持・更新費用の抑制に努める必要がある。

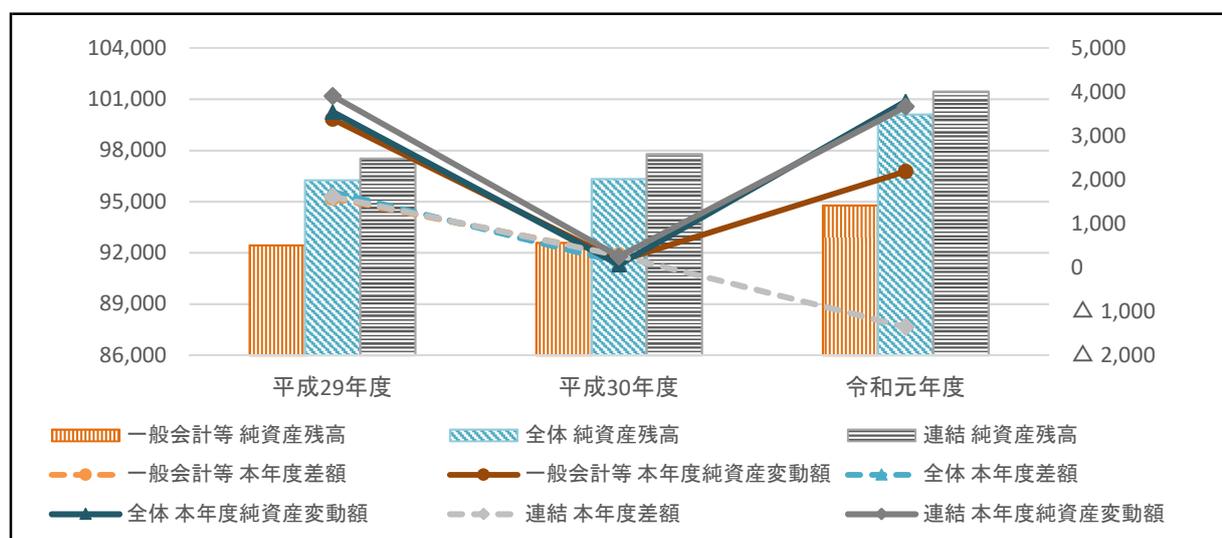
全体会計は、純経常行政コストが前年度と比較し1,154百万円増加(+2.9%)し41,385百万円となった。その主な要因は、業務費用のうち物件費等が2,552百万円増加(+14.5%)したことなどにより経常費用が2,207百万円増加(+4.4%)したためである。

連結会計は、純経常行政コストが前年度と比較し1,408百万円増加(+2.9%)し49,467百万円となった。その主な要因は、全体会計と同様に物件費等が増加したことなどにより、経常費用が2,430百万円の増加(+4.1%)したためである。

(3) 純資産変動の状況

(単位：百万円)

		平成29年度	平成30年度	令和元年度	前年度比較
一般会計等	本年度差額	1,581	296	△ 929	△ 1,225
	本年度純資産変動額	3,383	151	2,194	2,043
	純資産残高	92,435	92,586	94,779	2,193
全体	本年度差額	1,725	122	△ 1,242	△ 1,364
	本年度純資産変動額	3,541	68	3,785	3,717
	純資産残高	96,256	96,324	100,110	3,786
連結	本年度差額	1,617	273	△ 1,352	△ 1,625
	本年度純資産変動額	3,911	254	3,669	3,415
	純資産残高	97,529	97,783	101,452	3,669



分析

一般会計等は、税収等の財源30,223百万円が純行政コスト31,151百万円を下回ったことから、本年度差額は△929百万円となり前年度と比較し1,225百万円の減少(△413.9%)となった。その主な要因は、平成30年7月豪雨の災復旧事業費用が増額したことにより前年度と比較し純行政コストが2,003百万円増加(+6.9%)したことや、普通交付税の合併特例措置の段階的縮減の影響などにより税収等が567百万円減少(△2.3%)したためである。今後も普通交付税の減少が見込まれるため「選択と集中」による事業の見直しが必要である。本年度純資産変動額は2,194百万円で前年度と比較し2,043百万円の増加(+1353.0%)となった。その主な要因は、下水道事業会計が連結対象団体となったためである。

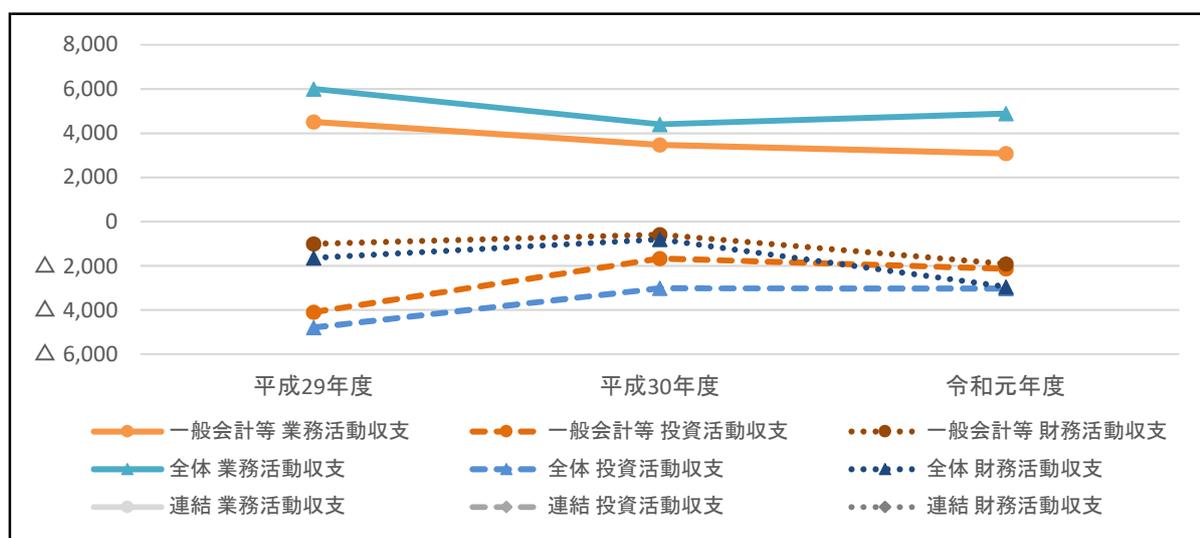
全会計は、税収等の財源42,813百万円が純行政コスト44,055百万円を下回ったことから、本年度差額は△1,242百万円となり、前年度と比較し1,364百万円の減少(△1118.0%)となった。一般会計等と同様の要因により本年度純資産変動額は3,785百万円となり、純資産残高は100,110百万円となった。

連結会計は、税収等の財源50,785百万円が純行政コスト52,137百万円を下回ったことから、本年度差額は△1,352百万円となり、一般会計等と同様の要因により、前年度と比較し1,625百万円の減少(△595.2%)となった。本年度純資産変動額は3,669百万円となり、純資産残高は101,452百万円となった。

(4) 資金収支の状況

(単位：百万円)

		平成29年度	平成30年度	令和元年度	前年度比較
一般会計等	業務活動収支	4,515	3,470	3,088	△ 382
	投資活動収支	△ 4,094	△ 1,666	△ 2,134	△ 468
	財務活動収支	△ 1,006	△ 584	△ 1,914	△ 1,330
全体	業務活動収支	6,009	4,406	4,895	489
	投資活動収支	△ 4,792	△ 3,016	△ 3,031	△ 15
	財務活動収支	△ 1,641	△ 800	△ 2,947	△ 2,147
連結	業務活動収支				
	投資活動収支				
	財務活動収支				



分析

一般会計等では、災害復旧事業費支出が前年度と比べ1,336百万円増加(+109.3%)したことなどから、業務活動収支は3,088百万円(前年度比△382百万円)となった。投資活動収支は、平成30年7月豪雨災害の影響などにより公共施設等整備費支出が減少したことなどから、△2,134百万円(前年度比△468百万円)となった。財務活動収支は、繰上償還などにより地方債償還支出が地方債発行収入を上回ったことから、△1,914百万円(前年度比△1,330百万円)となった。結果として本年度末資金残高は前年度末から961百万円減少(△46.5%)し1,107百万円となった。経常的な活動に係る支出は税込等収入などの業務収入で賄えている。

全体会計では、業務活動収支は4,895百万円(前年度比+489百万円)となった。投資活動収支は一般会計等と同様、公共施設等整備費支出が減少したことなどから△3,031百万円(前年度比△15百万円)となった。財務活動収支は、地方債等償還支出が増加したことなどから△2,947百万円(前年度比△2,147百万円)となっており、結果として本年度末資金残高は前年度から1,083百万円減少(△17.2%)し、5,220百万円となった。

11 一般会計等の指標分析

(1) 資産の状況

ア 住民一人当たり資産額

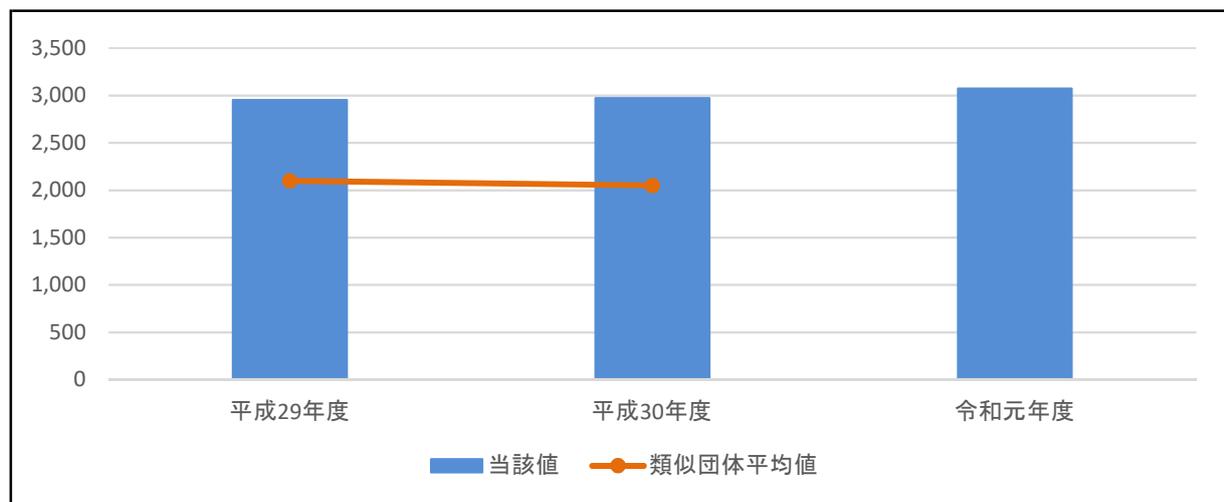
(単位：千円，人)

	平成29年度	平成30年度	令和元年度	前年度比較
資産合計	157,080,150	156,220,113	159,474,488	3,254,375
人口	53,204	52,556	51,880	△ 676
当該値	2,952	2,972	3,074	101
類似団体平均値	2,101	2,051		

算定式	資産合計÷住民基本台帳人口
<p>◆資産合計 貸借対照表の資産合計</p> <p>◆住民基本台帳人口 平成29年度 H30.1.1現在 平成30年度 H31.1.1現在 令和元年度 R2.1.1現在</p>	

指標の説明

資産額を住民基本台帳人口で除して住民一人当たり資産額とすることにより、住民等にとって理解しやすい情報になるとともに、他団体との比較が容易になる。



分析

住民一人当たり資産額は、平成30年度においても類似団体平均を大きく上回っている。その要因としては、本市は8市町村が合併したことに伴い機能の重複した施設も多く、人口規模の割には多くの公共施設が配置され、類似団体よりも資産保有量が多くなっているからである。

また、令和元年度は下水道事業会計が連結対象団体となった影響で資産が増加し、さらに人口減少の影響により、住民一人当たり資産額は増加している。

資産保有量が多い場合、住民へのサービスは十分に行えていると言えるが、その反面、施設の維持管理や更新等にコストがかかり、結果として財政状態を圧迫する要因となりえる。

今後も人口減少や施設維持コストに対応するため、適正な資産規模を目指し、新規整備の抑制や施設の廃止・集約化・複合化など公共施設等総合管理計画に基づき資産保有量の減少に取り組む必要がある。

イ 歳入額対資産比率

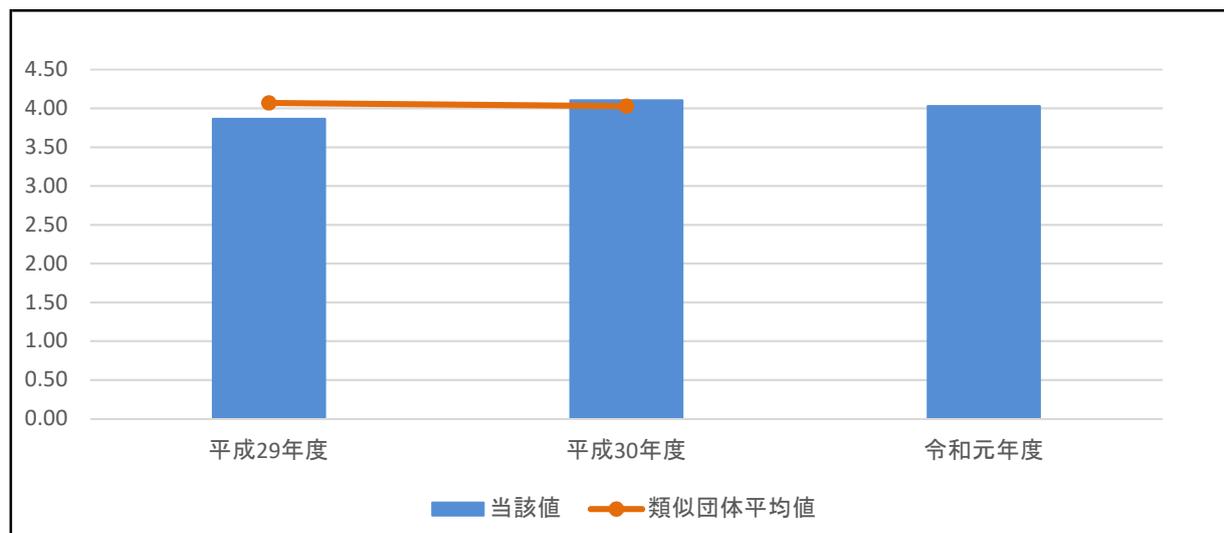
(単位：百万円，年)

	平成29年度	平成30年度	令和元年度	前年度比較
資産合計	157,080	156,220	159,474	3,254
歳入総額	40,653	38,081	39,581	1,500
当該値	3.86	4.10	4.03	△ 0.07
類似団体平均値	4.07	4.03		

算定式	資産合計 ÷ 歳入総額
<p>◆資産合計 貸借対照表の資産合計</p> <p>◆歳入総額 資金収支計算書の業務収入，臨時収入，投資活動収入，財務活動収入，前年度末資金残高の合計</p>	

指標の説明

当該年度の歳入総額に対する資産の比率を算出することにより，これまでに形成されたストックとしての資産が，歳入の何年分に相当するかを表し，地方公共団体の資産形成の割合を把握することができる。



分析

歳入額対資産比率は，平成30年度では歳入総額が減少し当該値が増加したため類似団体平均を少し上回っている。令和元年度については下水道事業会計が連結対象となったため資産が増加しているが，歳入額も増加し，歳入額対資産比率は前年度に比べ減少している。

歳入額対資産比率は平均的な水準であるが，合理的かつ住民の納得のいく「選択と集中」により資産更新を行い，資産額の適正化を図る必要がある。

ウ 有形固定資産減価償却率

(単位：百万円，%)

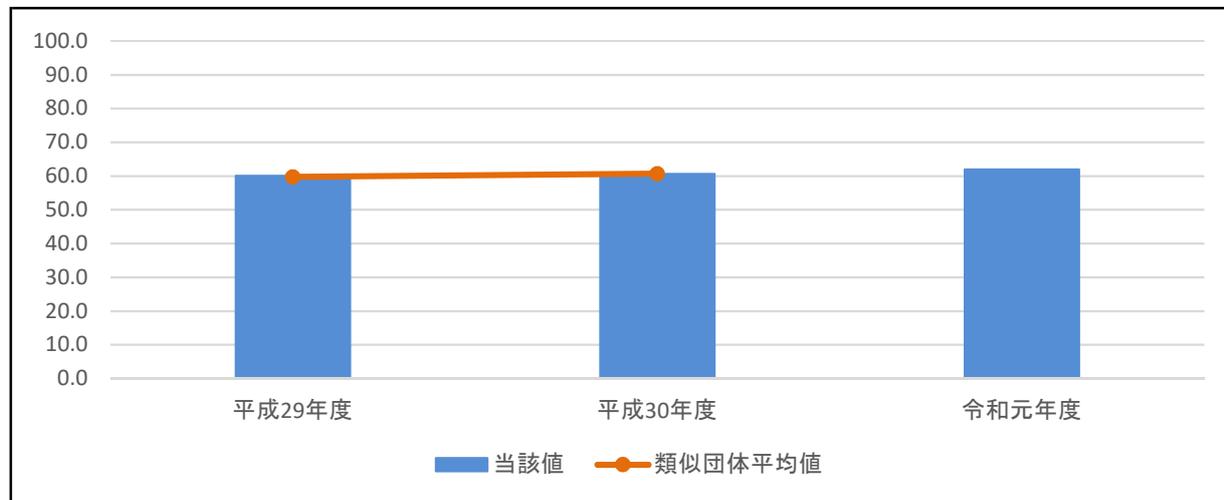
	平成29年度	平成30年度	令和元年度	前年度比較
減価償却累計額	136,792	139,414	141,688	2,274
有形固定資産 ※1	227,561	229,981	228,576	△ 1,405
当該値	60.1	60.6	62.0	1.4
類似団体平均値	59.8	60.7		

※1 有形固定資産合計－土地等の非償却資産＋減価償却累計額

算定式	減価償却累計額 ÷ (有形固定資産合計－土地等の非償却資産＋減価償却累計額)
◆減価償却累計額	貸借対照表の事業用資産及びインフラ資産に属する各減価償却累計額の合計
◆有形固定資産合計	貸借対照表の有形固定資産
◆土地等の非償却資産	貸借対照表の事業用資産の土地，立木竹，建設仮勘定，インフラ資産の土地，建設仮勘定及び物品の合計

指標の説明

有形固定資産のうち，償却資産の取得価格等に対する減価償却累計額の割合を算出することにより，耐用年数に対して資産の取得からどの程度経過（老朽化）しているのかを全体として把握することができる。



分析

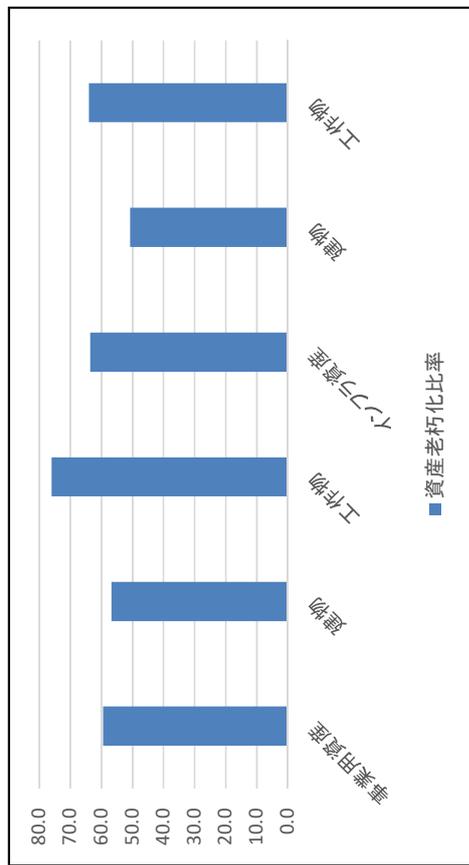
有形固定資産減価償却率は，インフラ資産のうち工作物の固定資産減価償却率が高いことが影響している。令和元年度は前年度末と比較して道路や橋りょうなどのインフラ資産の減価償却率が増加しているため，固定資産減価償却率は1.4%増加している。

施設全体をみると類似団体と比較して大きく老朽化が進んでいるわけではないが，公共施設等総合管理計画や個別施設計画に基づき，老朽化した施設について，点検・診断や計画的な予防保全による長寿命化を進めていくなど，老朽化対策に努める必要がある。

工 有形固定資産の性質別減価償却率

(単位：百万円，%)

	取得原価	減価償却累計額	構成比	資産老朽化比率
事業用資産	87,784	52,146	41.0	59.4
建物	75,760	43,000	37.7	56.8
工作物	12,024	9,146	3.3	76.1
インフラ資産	140,792	89,542	59.0	63.6
建物	4,122	2,094	2.3	50.8
工作物	136,670	87,448	56.6	64.0
合計	228,576	141,688	100.0	62.0



分析

有形固定資産の減価償却率を性質別に確認すると、最も老朽化比率が高い資産は市営プールなどの事業用資産の工作物(76.1%)であり、続いて道路、橋りょうや公園などのインフラ資産の工作物(64.0%)である。

今後は、事業用資産の工作物の更新についても、個別施設計画にて検討し、老朽化抑制に努める必要がある。

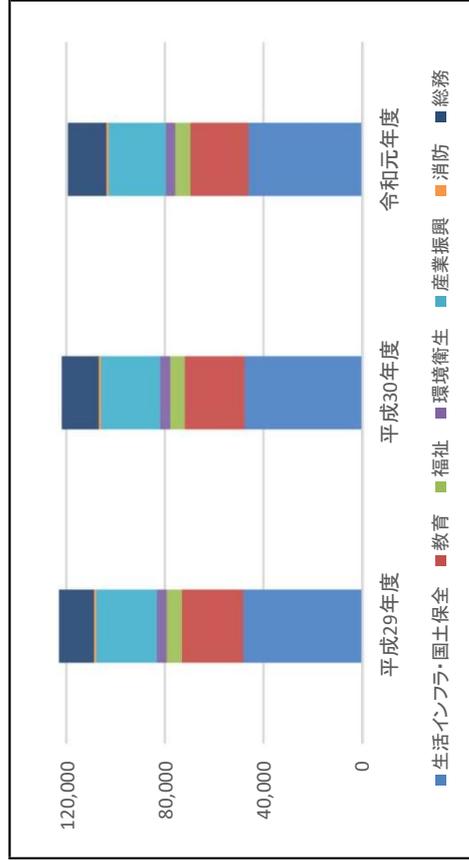
才 有形固定資産の行政目的別割合

(単位：百万円、%)

	平成29年度		平成30年度		令和元年度		前年度比較	
	金額	構成比	金額	構成比	金額	構成比	金額	伸び率
生活インフラ・国土保全	48,218	39.2	47,647	39.1	46,051	38.6	△ 1,596	△ 3.3
教育	24,882	20.2	24,231	19.9	23,547	19.7	△ 684	△ 2.8
福祉	6,150	5.0	5,924	4.9	6,180	5.2	256	4.3
環境衛生	4,008	3.3	4,074	3.3	3,797	3.2	△ 277	△ 6.8
産業振興	24,617	20.0	24,031	19.7	23,245	19.5	△ 786	△ 3.3
消防	858	0.7	878	0.7	931	0.8	53	6.0
総務	14,207	11.6	15,071	12.4	15,605	13.1	534	3.5
合計	122,941	100.0	121,856	100.0	119,357	100.0	△ 2,499	△ 2.1

指標の説明

有形固定資産の行政目的別（生活インフラ・国土保全、福祉、教育など）の割合を算出することにより、行政分野ごとの社会資本形成の比重の把握が可能となる。また、経年比較することにより、行政分野ごとに社会資本がどのように形成させてきたかを把握することができる。



分析

有形固定資産の行政目的別割合では、道路、橋りょうや公園などの生活インフラ・国土保全目的が38.6%と割合が高く、続いて、小中学校や体育施設などの教育目的が19.7%、林道、農道や市有林などの産業振興目的が19.5%となっている。有形固定資産の合計額は前年度末から2,499百万円の減少(△2.1%)となった。吉舎町拠点施設の整備などに伴う総務目的の有形固定資産が増加したものの、平成30年7月豪雨災害の復旧を優先したため、産業振興目的、教育目的や生活インフラ・国土保全目的の有形固定資産は、本年度増加額を本年度償却額が上回っているため減少している。

(2) 資産と負債の比率

ア 純資産比率

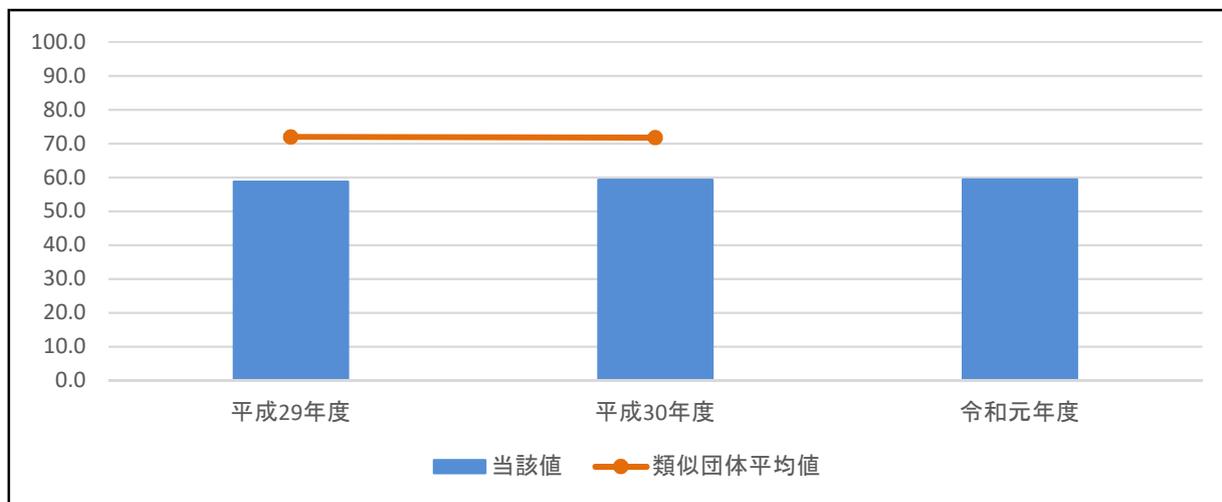
(単位：百万円，%)

	平成29年度	平成30年度	令和元年度	前年度比較
純資産	92,435	92,586	94,779	2,193
資産合計	157,080	156,220	159,474	3,254
当該値	58.8	59.3	59.4	0.1
類似団体平均値	72.0	71.8		

算定式	純資産合計 ÷ 資産合計
◆純資産合計 貸借対照表の純資産合計 ◆資産合計 貸借対照表の資産合計	

指標の説明

地方債の発行を通じて、将来世代と過去及び現世代の負担の分配を行うと考えれば、純資産の変動は、将来世代と過去及び現世代との間で負担の割合が変動したことを意味する。純資産の増加は、過去及び現世代の負担により将来世代が利用可能な資源を蓄積したことを表す一方、純資産の減少は、将来世代が利用可能な資源を過去及び現世代が消費していると捉えられる。



分析

純資産比率は、平成30年度においても類似団体平均を下回っているが、これは市町村合併に伴って類似団体より行政面積が広いため公共施設が多く、その更新や整備などの財源として地方債を発行していることや、ソフト事業への財源としても地方債を発行しているためである。

令和元年度は前年度と比較し、ほぼ同率となっているが、類似団体と比較すると純資産の割合は依然低く負債（地方債）に依存した財政構造といえる。

イ 将来世代負担比率

(単位：百万円，%)

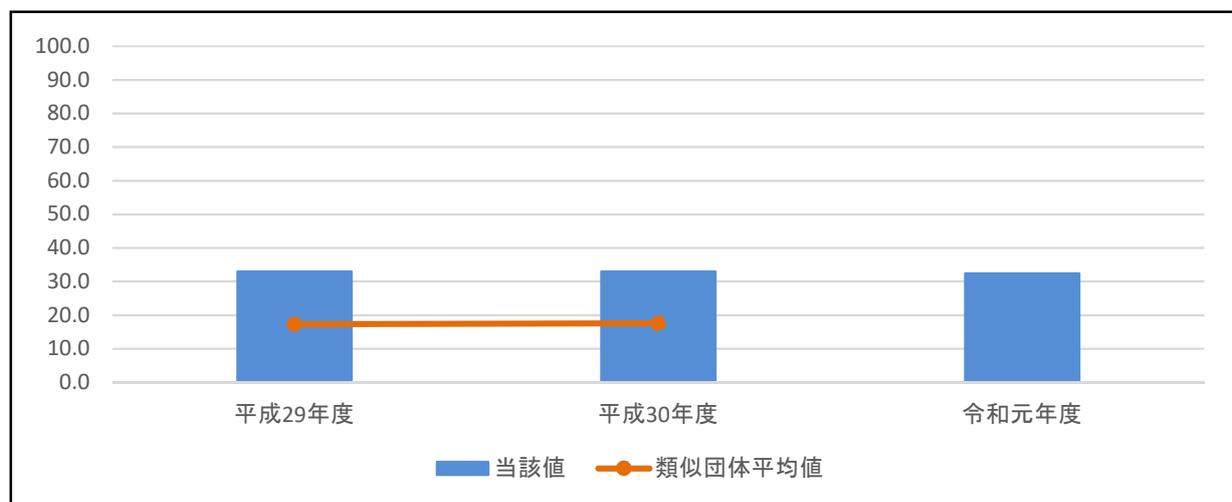
	平成29年度	平成30年度	令和元年度	前年度比較
地方債残高 ※1	40,566	40,186	38,763	△ 1,423
有形・無形固定資産合計	123,051	121,943	119,416	△ 2,527
当該値	33.0	33.0	32.5	△ 0.5
類似団体平均値	17.3	17.6		

※1 特例地方債の残高を控除した後の額

算定式	地方債合計（特例地方債を除く）÷有形・無形固定資産合計
<p>◆地方債合計（特例地方債を除く） 貸借対照表の地方債と1年内償還予定地方債の合計より、必ずしも社会資本等形成に充当されない特例的な地方債として、臨時財政対策債、減収補てん債特例分、減税補てん債、臨時税収補てん債、臨時財政特例債の合計を除いたもの。</p> <p>◆有形・無形固定資産合計 貸借対照表の有形固定資産と無形固定資産の合計</p>	

指標の説明

有形固定資産などの社会資本等に対して、将来の償還等が必要な負債による調達割合（公共資産等形成充当負債の割合）を算定することにより、社会資本等形成に係る将来世代の負担の程度を把握することができる。



分析

将来世代負担比率は、地方債残高が多いため、平成30年度において類似団体平均を大きく上回っている。令和元年度は繰上償還などにより地方債借入額を償還額が上回ったため前年度と比較して地方債残高が減少している。

将来世代負担比率が高いことは将来世代への負担が高く、健全な運営ができていないことを示しているため、新規に発行する地方債を抑制し、繰上償還を行うなど地方債残高を圧縮し、将来世代の負担の減少に努める必要がある。

ただし、負債の大半を占めているのは、交付税算入率の高い過疎対策事業債や合併特例事業債であり、将来の普通交付税の算定基礎である基準財政需要額に算入される見込みである。

(3) 負債の状況

ア 住民一人当たり負債額

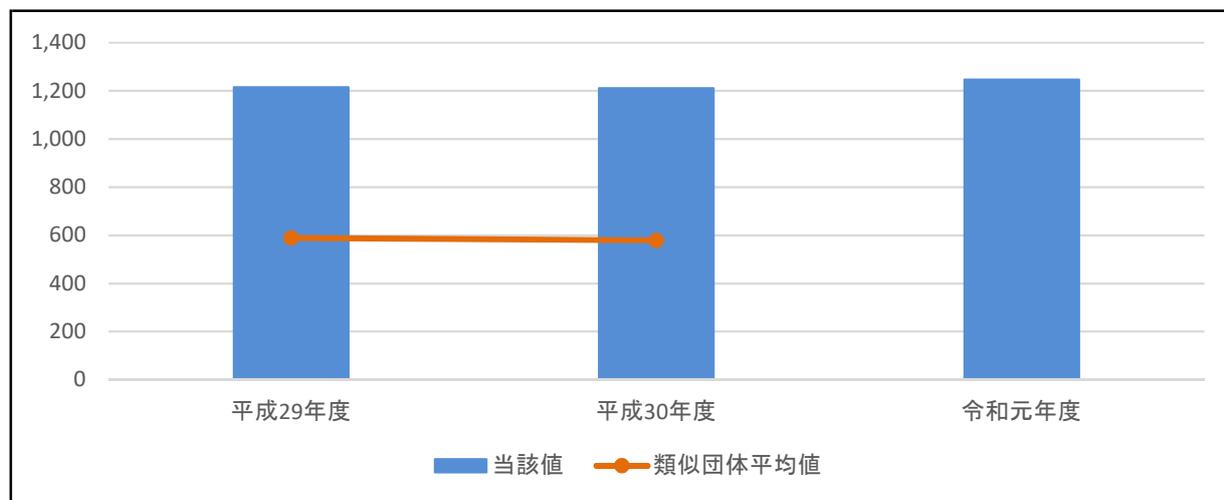
(単位：千円，人，%)

	平成29年度	平成30年度	令和元年度	前年度比較
負債合計	64,645,578	63,634,265	64,695,016	1,060,751
人口	53,204	52,556	51,880	△ 676
当該値	1,215	1,211	1,247	36
類似団体平均値	589	579		

算定式	負債合計÷住民基本台帳人口
<p>◆負債合計 貸借対照表の負債合計</p> <p>◆住民基本台帳人口 平成29年度 H30.1.1現在 平成30年度 H31.1.1現在 令和元年度 R2.1.1現在</p>	

指標の説明

負債額を住民基本台帳人口で除して住民一人当たり負債額とすることにより、住民にとって理解しやすい情報になるとともに、他団体との比較が容易になる。



分析

住民一人当たり負債額は、地方債残高が多いため、平成30年度においても類似団体を大きく上回っている。また、令和元年度は前年度と比較して、繰上償還などにより地方債償還額が借入額を上回ったことで地方債残高は減少しているが、人口の減少も進んでおり住民一人当たり負債額はやや増加している。

負債の大半を占めているのは、交付税算入率の高い過疎対策事業債や合併特例事業債と地方交付税の不足を補うために特例的に発行している臨時財政対策債であるが、今後も必要性や緊急性などを勘案し事業を精査し、地方債の新規発行額の抑制に努める必要がある。

イ 基礎的財政収支

(単位：百万円)

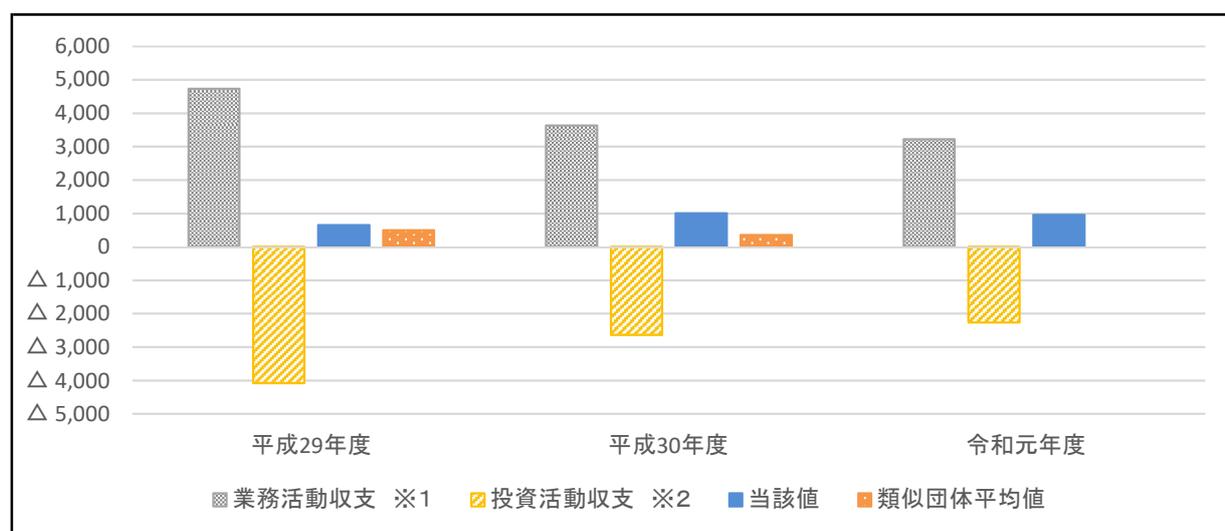
	平成29年度	平成30年度	令和元年度	前年度比較
業務活動収支 ※1	4,734	3,638	3,226	△ 412
投資活動収支 ※2	△ 4,081	△ 2,636	△ 2,265	371
当該値	653	1,002	961	△ 41
類似団体平均値	498	360		

※1 支払利息支出を除く。 ※2 基金積立金支出及び基金取崩収入を除く。

算定式	業務活動収支（支払利息支出を除く）＋投資活動収支（基金を除く）
<p>◆業務活動収支（支払利息支出を除く） 資金収支計算書の業務活動収支より支払利息支出を除いたもの</p> <p>◆投資活動収支（基金を除く） 資金収支計算書の投資活動収支より基金積立金支出及び基金取崩収入を除いたもの</p>	

指標の説明

資金収支計算書上の業務活動収支（支払利息支出を除く。）及び投資活動収支の合算額を算出することにより、地方債等の元利償還額を除いた歳出と、地方債等発行収入を除いた歳入のバランス指標となり、当該バランスが均衡している場合には、経済成長率が長期金利を下回らない限り経済規模に対する地方債等の比率は増加せず、継続可能な財政運営が実現できていると捉えることができる。



分析

基礎的財政収支は、業務活動収支の黒字分が投資活動収支の赤字部分を上回ったため、961百万円の黒字となっている。平成30年度において、類似団体と比較するとやや上回っている。また、令和元年度は前年度と比較して、基礎的財政収支は41百万円減少（△4.1%）している。その主な要因は、平成30年7月豪雨災害の災害復旧事業費が増加したことなどにより、業務活動収支が382百万円減少（△11.0%）したためである。

今後、人口減少や普通交付税の合併特例措置の段階的縮減などの影響により業務活動収支の減少が見込まれることから、必要な事業を峻別し公共施設等整備費支出の抑制に努める必要がある。

(4) 行政コストの状況

ア 住民一人当たり行政コスト

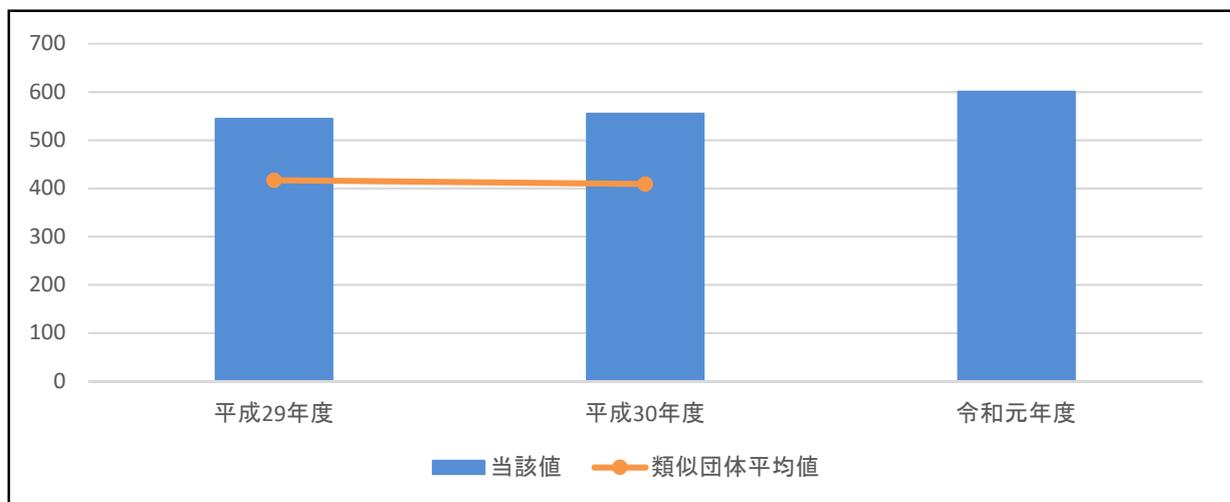
(単位：千円，人)

	平成29年度	平成30年度	令和元年度	前年度比較
純行政コスト	28,974,673	29,147,895	31,151,178	2,003,283
人口	53,204	52,556	51,880	△ 676
当該値	545	555	600	46
類似団体平均値	417	409		

算定式	純行政コスト÷住民基本台帳人口
<p>◆純行政コスト 行政コスト計算書の純行政コスト</p> <p>◆住民基本台帳人口 平成29年度 H30.1.1現在 平成30年度 H31.1.1現在 令和元年度 R2.1.1現在</p>	

指標の説明

行政コスト計算書で算出される行政コストを住民基本台帳人口で除して住民一人当たり行政コストとすることにより、行政活動の効率性を見ることができる。



分析

住民一人当たり行政コストは、平成30年度において類似団体を大きく上回っている。特に、純行政コストのうち4割を占める物件費等が類似団体と比較すると高く、住民一人当たり行政コストが高くなる要因となっていると考えられる。また、平成30年7月豪雨災害の影響により臨時損失である災害復旧事業費が前年度と比較し1,336百万円増加したことに加え、人口が減少しているため、住民一人当たり行政コストは増加している。

人口の減少に伴い、適正な資産規模を目指し、新規整備の抑制などすることで施設維持費や減価償却費を減少させるとともに、物件費等の低減や行政サービスの「選択と集中」を図ることで行政コストの減少に努める必要がある。

(5) 受益者負担の状況

ア 受益者負担比率

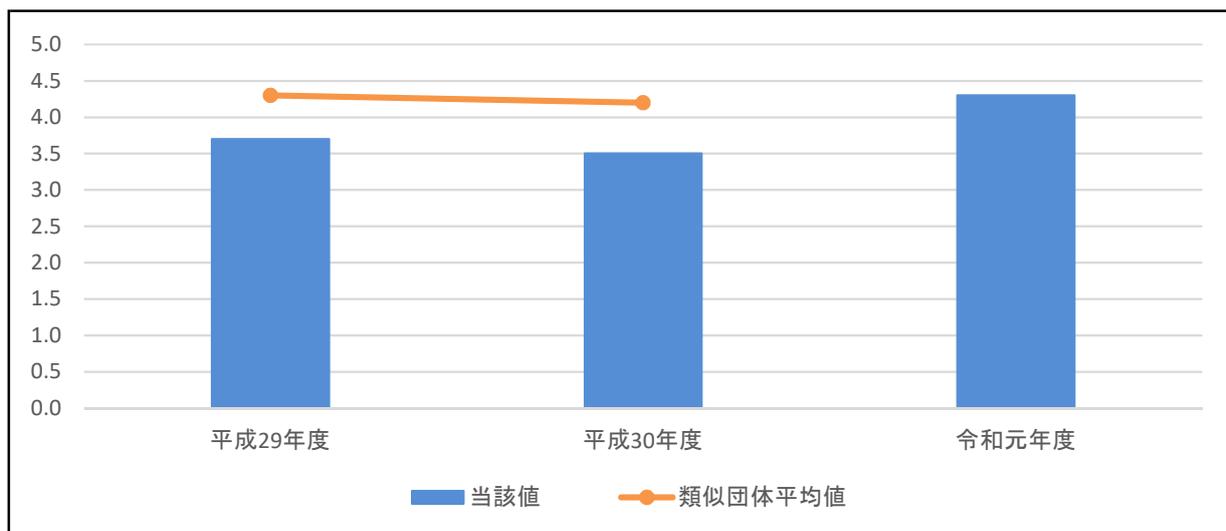
(単位：百万円，%)

	平成29年度	平成30年度	令和元年度	前年度比較
経常収益	1,120	1,004	1,281	277
経常費用	29,925	28,997	29,814	817
当該値	3.7	3.5	4.3	0.8
類似団体平均値	4.3	4.2		

算定式	経常収益 ÷ 経常費用
◆経常収益 行政コスト計算書の経常収益 ◆経常費用 行政コスト計算書の経常費用	

指標の説明

行政コスト計算書の経常収益は、使用料・手数料など行政サービスに係る受益者負担の金額を表すため、これを経常費用と比較することにより、行政サービス提供に対する直接的な負担の割合を算出することができる。



分析

受益者負担比率は、平成30年度において類似団体を下回っており、行政サービス提供に対する直接的な負担の割合は低くなっている。また、令和元年度は前年度から比較すると増加しているが、主な要因は「その他」の雑入（三江線代替交通運営費用協力金等）の増加であり、施設利用料が含まれる「使用料及び手数料」は減少している。

なお、令和元年度は平成30年度の類似団体平均と比べ、ほぼ同率となっているが、今後も公共施設等の利用率の向上を図るとともに、公共施設等の使用料の見直しを行うなど、受益者負担の適正化に努める必要がある。また、公共施設等総合管理計画に基づき、老朽化した施設の集約化・複合化や長寿命化を行うことにより、経常費用の削減に努める必要がある。